

空

平成25年10月20日発行

第11卷5号

通巻第51号

空



2013・10

SORA 51号

福岡 矢野百合子

灯籠堂菩提樹落花ただ中に
飾り山笠動く白煙気炎吐き
滝落ちて普通の水となりにけり
岩肌に文字書くごとく滴りぬ
揚花火胸襟開けと迫り来る

福岡 山内 碧

七重八重音なき花火病窓に
大花火此の世彼の世へひらきけり
病窓の照り降りいつしか秋の雲
退院や久々に焚く蚊遣香
捕へよと誘ふ低さに揚羽蝶

福岡 亀井紀子

猫までも出払つてゐる秋の昼
裏返る風のごとくに鴟の声
山の端の月の動きぬ恋新た
虫干や文鎮据えし第九条
科つくる男ありけり水蜜桃

吉井 高倉恵美子

明日征くと言ふ君と居し螢の夜
夫婦して昭和丸ごと生きて夏
八十は若いと笑ふ生身魂
終戦日百歳祝ふ菓子の出で
耳栓を外して秋思はじまれり

兵庫 戸栗末廣

急ぐ水急がぬ雲や秋の風

凭れぬる木にひぐらしの鳴きはじむ

島裾に灯りつらなる新豆腐

魚店の厚き俎板鳥渡る

波音の夕べは近し盆の道

大阪 田岡千章

老僧の浮くごと歩み梅雨の月

目葉をこぼさず注せて夏燕

蝙蝠や子捕るところに日が暮れる

下闇を出で胸襟を正しうす

ところてん真顔といふは恐ろしき

須恵 苑 実 耶

死ぬること恐れぬ蛇を恐れても

夕端居ひとりをよしとすることも

新涼や書棚を満たす推理本

馴れ初めを熱く語りり月の客

吾亦紅山の向かうの山目ざし

長崎 鳳 蛮 華

通信の行き交ふ空や新松子

月見草ヘッドライトに浮き沈み

風鈴の自問自答のすゑ一打

炎天や巡航船のちぎれ旗

担任の登校拒否や百日紅

東京 山田 正子

天の川鯨を海に帰しけり

ハンカチをたたみ直して決めにけり

風の中どれがどの音風鈴屋

茄子の馬花街の中通り抜け

良夜かな猫も夜道を歩くなり

粕屋 秋 千 晴

ふる里の方へ流るる鰯雲

値切ること控へてゐたる草の市

頂点に大きな林檎盛られをり

根子岳の風に包まれ月祭る

玄海の潮ひき連れて鰯跳ぬる

福岡 栗原 京子

派手に着く巨船の汽笛大南風

神々が彼方此方に出で飾山笠

大蛇への酒樽八つ飾山笠

英雄は解体されて山笠果てぬ

玄海の夏の波引く砂の音

福岡 田代 貞枝

夏山の杉黒々と高々と

山笠動く万の見物人動く

脊を割りて蠅やはらかく生れけり

夕立の空を濡らさず過ぎにけり

母と居る送り火の燠消ゆるまで

粕屋 長 憲 一

大阪 青木 朋子

菜の花の岬に高き波しぶき

細枝に二匹抱き合ふ蟬の殻

遍路笠一列に坂登り来る

空蟬の三つ連なる枝の揺れ

花屑の吹き寄せらるる五穀神

空蟬の眸のあり処ことに透く

新茶煎るかまどの煙まつすぐに

琥珀色したる空蟬胸に留む

げんげ田をつなぐ畦にも蓮華草

空蟬の主は櫛に移りけり

東京 今井 春生

山梨 野畑 さゆり

耳栓をすれば波音夜のプール

十葉や朽ちたるままの空家札

じやんけんに負けたあの日の立葵

母の忌の月の色なり月見草

海月には海月の言ひ分優男

盆灯籠五十の父の笑顔かな

王宮に銃痕あまた蟬しぐれ

父母ありしころの縁側衣被

花束にひまはりも入れ壮行会

泣きながら兄につきゆくとなぼ捕り

福岡 樋口みのぶ

青簾星を増やして巻き上ぐる
向き合ひてくづす楽しさかき氷
網戸より三味の流るる夕べかな
馴染むまで頭の歪つなる籠枕
天井にねずみ走りし頃の夏

千葉 原 友 子

立秋や四隅をピンとシーツ干す
竹林に夕日満ちをり迎へ盆
丹田のすこし緩びて盆のあと
雁やしごきし反古の燃えゆるび
知恵しぼり檸檬を絞り永らふる

福岡 あさなが捷

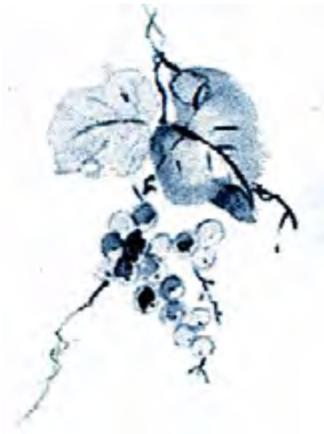
案山子翁減農薬の旗掲げ
せんぶりや祖母の居間には違ひ棚
生姜糖同じ過ちくり返し
放送にかすかな訛茸飯
生れてより死へと踏み出す赤のまま

東京 古川 夏 子

蓮池の翳りに兆す蕾かな
朝涼の月うすうすと残りけり
帰りゆく子の背の広き良夜かな
菊膾母九十の箸さばき
父母在りて限界集落雁渡し

福岡 吉村摂護

家々に囲まれてゐる青田かな
防人の碑の立つ森の涼しさよ
夏草に擦られてゆく大車輪
青芒ボール拾ひの子に触るる
青々と稲立ち上る残暑かな



空作品評

柴田佐知子

ご機嫌を伺ふやうな作り滝

中田みなみ

天地を轟かせて限りなく水を落す瀧は、神々しいまでの自然の威厳を感じる圧倒的な存在である。掲句に詠まれたのは人間が人間の愉楽のために作られた「作り滝」。一切に媚びることなき自然界の瀧とは異なり、人間が気に入れば、お役目は充分に果たしたといえるものである。この「作り滝」の本質が、「ご機嫌を伺ふやうな」と見事に表出されている。

神鏡に何も映らず敗戦日

野上 杏

昭和二十年八月十五日、ポツダム宣言を受諾して第二次世界大戦が終了した日をかえりみた「終戦記念日」。俳人は「敗戦日」「終戦日」とともに、戦没された方々への哀悼の思いをこめて「敗戦忌」「終戦忌」などを用いている。神前に祭られた鏡を詠まれたものかもしれないが、三種の神器の鏡へも思いが及ぶ。「何も映らず」という空白の部分、読む人の心に働きかけ、それぞれの思いをよびおこす。

樹は腕を伸ばし放題月の夜

吉田 菫

この句の面白さは「伸ばし放題」という表現だ。皓々たる月夜に枝が黒く伸びる。その枝の先の先まで見えるのは澄んだ月光の中だからこそ。光と影のコントラストが美しい。

鶏小屋の奥の丸見え望の月

宮井 知英

山岳信仰の地で一泊吟行した時、夜中に天狗杉まで行った。街灯など勿論無い。しかし満月の道は影踏みが出来るほど明るく、句帳の字もはつきり見えた。掲句はこのような満月の夜であろう。日本の四季の美を代表する雪月花のひとつ「月」の雅と「鶏小屋」の俗との取り合せが面白い。

大花火此の世彼の世へひらきけり 山内 碧

花火の束の間の絢爛は、見上げる者にさまざまな感懐をもたらす。美しいからこそ、一層の無常を感じさせられることも。「此の世彼の世へひらきけり」の儚くも詩情豊かな表現が秀抜だ。

ところてん真顔といふは恐ろしき 田岡 千章

噴上げの夜は一枚の水となる 森 俊人

確かに、静かな真顔には怖さがある。また「ところてん」などと真顔で切り出されると何事かと身構えてしまう。「ところてん」によって滑稽味が加味されているところに作者の個性の一つが見える。

死ぬること恐れぬ蛇を恐れても 苑 実耶

終電の男の膝にバラの束 井手本恭子

こちらの句も恐れてはいるのだが、芯はなかなか骨太だ。蛇を怖がっていても、それを「死」と対比させるのだから。

ああでもないこうでもないと火蛾狂ふ 原 友子

男性がバラの花束を持っているとなると、定年退職されたのだろうかと考える。終電であれば、送別会のと二次会・三次会へと流れてゆかれたのであろう。このような背景は一切省かれているが、一編のエッセイが生まれそうな作品である。

「火蛾」は夏の夜、燈火に集まる蛾のこと。灯に魅せられたように狂い飛ぶ蛾と一体となって得た表現の妙に感じ入った。

その他注目した句を次に掲げる

蚊のごとく一打で死せることもよし 白水 良子

空蟬の眸のあり処ことに透く 青木 朋子
馴染むまで頭の歪つなる籠枕 樋口みのぶ
士官涼し二人の時も歩を揃へ 鳳 蛮華
色付きの素麺ほどの誇りかな 乾 有杏

毎夏、蚊を打っているが私はこのような句はできなかった。良子さんは蚊を打った瞬間に浮かんだ思いを素直に詠まれたのかもしれない。死が詠まれているのだが、楽しく共鳴した。

蜘蛛の囀の裏側すでに暮れてをり えとう樹里
満月や好きな言葉に朱線引く 遠山のり子
打ち水に舞ひ戻りたる黒揚羽 清水 量子

空集

柴田佐知子選

影を曳き山内へ入る蟻の列

遠くより山は見るもの竹床几

閑古鳥こだまが好きと鳴きにけり

ミステリーバスの行方や田水沸く

歯の見えて日焼の顔でありにけり

撒きし水たちまち乾く終戦日

たましひを招く手揃へ踊りけり

終戦日夕餉の茶碗の明るさよ

竹婦人一度も抱かずじまひなり

蚊のごとく一打で死せることも良し

帰省子に力仕事をつぎつぎと

夏帽子だけ見えてゐる園児バス

ほうたるが縁で結婚したと言ふ

命よりうまるるいのち天の川

自転車で来し老医師や日焼の掌

薔藪園や金銀の雨降り注ぐ

兵庫 戸栗末廣

打ち水のはじめの水の弾かるる

活けられて百合の重心高くなり

月光のじつとしてゐる蟬の羽化

作り滝離れて水の逆流す

メガホンで呼ばれてゐたる恋ポート

下駄履きで月下美人の前に立つ

ああでもないこうでもないと火蛾狂ふ

滝壺をいでてしづかな川となる

立ち尽くし黙すほかなき滝のまへ

束の間の午睡に海を渡りけり

どの部屋にも風の等しき鮎の宿

錆鮎の尾の大切に焼かれあり

熊本 松田明子

千葉 原 友子^{ともこ}

福岡 白水良子^{しらみずりようこ}

兵庫 織田高暢^{おりた たかのぶ}